

宵闇照らす、 蛍火を求めて

[連載]

未来の匠

一次世代へ「技」を受け継ぐ人たち—
赤絵細描絵付師

[かわら版]

年間スケジュール
講座のご案内



「江戸自慢三十六興 落合ほたる」(部分)・広重・豊国・国立国会図書館所蔵

宵闇照らす、蛍火を求めて

夏の夜の風物詩・
蛍狩り

清少納言は、その随筆『枕草子』の中で次のように記す。

「夏は夜。月の頃はさらなり。闇はなほ。蛍の多く飛び違いたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし」

夏の興は夜にあること、蛍がたくさん飛び交うのもいいが、一二匹がほのかに灯る様も良い、と少納言は言う。

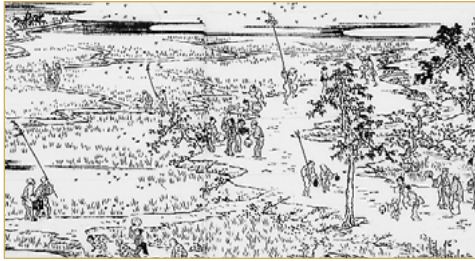
蛍を鑑賞するという行為は、そもそもは上流階級のもので、それがいわゆる蛍を見たり捕らえたりする遊び「蛍狩り」として広く一般的に流行するのは、江戸時代まで待たねばならない。とりわけ江戸時代末期には、王子・谷中・螢沢・高田落合・目白下通り・隅田川堤などが蛍狩りの名所として名を馳せるようになる。

なかでも谷中蛭沢と高田
落合の蛭は格別だったよ
うだ。『江戸名所花暦』に
よれば、谷中の蛭は「他と
比ぶれば光甚だしく、形
も大いなり」とし、その飛
び交う様はまるで星かと
見紛うほどであったという。

一方の高田落合も負け
ていない。『江戸名所図会』
では当地の蛭を「草葉に
すがるをば零れる露かと
疑ひ、高く飛ぶをばあま
つ星かと誤つ」とする。ま
た、三遊亭圓朝「怪談乳房
榎」には、大粒の蛭が飛び
交う景色を前に「畫(画)に
も書けぬ」と感嘆の声をも
らす絵師の姿が描かれて
いる。これらから、かつて
の谷中・落合の蛭は、双方
甲乙つけがたく、まさしく
満天の星かと思える
ほど壮観であったことが
よくわかる。

ほ、ほ、蛭来い
あつちの水は苦いぞ…

蛭の盛りは半夏生の頃
(立夏から四十日頃)と



長竿を持って蛭狩りをする人々。
『江戸名所図会』より落合蛭(部分)・国立国会図書館所蔵

されている。この時期に
なると、虫籠や団扇を片
手に、人々は黄昏時にも
なれば蛭狩りに出向く。
蛭狩りに夢中になる人々
の様子は、「絵本風俗往来」
に詳しい。

「…蛭を捕らへんとて日
暮れより男女の別なく児
童等打ち連れ長竿の穂先
へ竹の葉を結び付け、或
いは団扇、或いは紙袋な
どを付け、飛び巡れる蛭
を捕らへんと田の畔、小
川の岸辺を追ひて走れる
より足踏みそこねて池沼
に落ちるなど蛭狩には

往々あることなり」

蛭を追いかけるのに夢
中になるあまり、ついつ
い足元が疎かになって池
や沼に落ちる人が少なく
なかったようだ。

ちなみに、捕った蛭は
虫籠に入れて持ち帰り、
帰宅後、蚊帳を張った寝
所の中で放し、ほのかな
灯を楽しんだりすること
もあつたようだ。

鳴かぬ蛭が身を焦がす

ところで、和歌において
夏の季語である蛭は、一
方で恋心を象徴するもの
として古くから詠まれて
きた題材でもある。例え
ば『後拾遺集』に、源重之
の歌として次の歌がある。
音もせて思ひに燃ゆる
蛭こそ鳴く虫よりも

あはれなりけれ

「意識・音も立てず、ひそ
かに「思い」という火に燃
える蛭こそ、声を立てて
鳴く虫よりも、あわれ深
いというものだ」

さらに、『源氏物語』第



「はたるかり」(部分)・豊田・国立国会図書館所蔵

二十五帖・蛭巻に、玉鬘か
ら兵部卿宮への返歌とし
て、次の歌が見える。

声はせて身をのみ

焦がす蛭こそ

言ふよりまさる

思ひなるらめ(※)

「意識・声を立てないで身
を焦がすばかりの蛭の方
が、声に出したあなたよ
りもずっと思いが深いの
でしょうね」

ともに、鳴きこそしな
い蛭のその身を灯す火に、
焦がれる気持ちや激しい
恋情を見て詠んだ歌であ
る。このほかに、蛭を通

して恋心を詠んだ作品は
多いが、これは時を経た
江戸時代も変わらなかつ
たようだ。江戸時代中期
の民謡集『山家鳥虫歌』に
は次のようにある。

恋に焦がれて

鳴く蟬よりも

鳴かぬ蛭が身を焦がす

さて、すっかり蛭が減つ
てしまった現代、夏の夜
の風物詩に何かを託した
くとも、なかなか難しく
そうだ。

※この歌は、前掲の源重之の派生歌と言
われていた。

「次世代へ「技」を受け継ぐ人たち」

日本の「技」を受け継ぐ若き職人を紹介するこのコーナー。第二回は日本を代表する伝統工芸「九谷焼」の赤絵細描絵付師・織田恵美さんです。

九谷焼の始まりは、今から遡ることおよそ三五〇年前。その長い歴史の中、様々な画風が生み出されてきた。白い器に極細の筆で、髪の毛よりも細い赤い線を描き詰めて文様

を作り上げていく。それが九谷焼の赤絵細描。織田さんの仕事だ。

筆を握り始めて十六年、師・福島武山氏の下で十二年修行した後、現在は金沢の工房で作品制作に勤しむ。元々、細かい仕事が好きという織田さんは、時間がかかっても少しずつ白い器体が文様で埋まり、完成に近付いていく赤絵の作業がとてもしんどいと嬉しそうに話す。



「赤絵細描 香炉」・高さ73mm・Φ80mm

絵付を行う上で心がけていることは「絶対妥協しないこと」と「心と体を落ち着かせ、平常心で器と向き合うこと」。小紋ひとつ描くにしても、良くも悪くもその時の感情が表れてしまうという。作品には等身大の織田さんが投影されている。

作品制作において目指しているのは、オリジナリティ溢れる、寶石のようなかわいらしい赤絵。本来、中国的な図柄や小紋で器を埋める表現が多い赤絵細描だが、「模様を作るのが楽しい」という織田さんの作品は伝統に縛られることのない自由な表現に満ち溢れている。

「伝統工芸品という重いイメージではなく他にはないお気に入りを探す、という感覚で作品に接してもらいたい」と話す。

赤絵細描絵付師
織田恵美さん



「赤絵の繊細な技術を守るといふ使命を感じながらも、自然体で楽しく仕事を続けていけば自ずと納得のいく物に近づいていくのではないかと謙虚に語る織田さん。彼女の描く繊細な赤い線は、伝統と現代、そして未来をつないでいるかのようだ。

若い人にも受け入れられるような新しい感覚を「自分らしさ」で表現する織田さんに、赤絵細描の明るい未来を感じた。

企画展「華雅やきの赤絵細描-九谷赤絵の妙技」10/16~12/12開催

この秋、紅ミュージアムでは、九谷焼の「赤絵細描」に焦点を当てた企画展を開催します。

赤絵細描は、上掲記事中でも紹介した通り、九谷焼の絵付技法のひとつです。九谷焼といえは、まず思い起されるのは、古九谷の「青手」「五彩手」様式です。青手は緑・黄・紫の3色、五彩手は緑・黄・紫・紺青に赤を加えた5色で彩色した作品を指します。これら大胆で濃厚なタッチの古九谷期作品において、赤という色は決して主調を成すものではありませんでした。

ところが江戸末期、九谷焼の再興期になると、赤を主調とした画風が起こります。それが「赤絵細描」です。本展では、江戸末期から明治・大正期の赤絵細描作品をはじめ、現代の絵付師による作品をご鑑賞いただけます。

※本展限定商品、赤絵細描の紅器を発売予定。

◆紅ミュージアム年間スケジュール

	イベント	休館日・閉館時間の変更等
2010年6月	26(土) 特別講座「折形～江戸の優美なところ～」 14:00～16:00 講師:有馬霞水氏 ※詳細は下記参照	7(月)、14(月)、21(月)、28(月)
7月	30(金) 夏休みこども講座 「夏休みこども自由研究 紅ってなあに」 14:00～15:00 講師:弊社スタッフ ※詳細は下記参照	5(月)、12(月)、20(火)振替、26(月)
8月	6(金) 夏休みこども講座 「夏休みこども自由研究 紅ってなあに」 14:00～15:00 講師:弊社スタッフ ※詳細は下記参照	2(月)、9(月)、16(月)、23(月)、30(月)
9月	18(土) 第9回「江戸の化粧再現」講座 14:00～15:00 講師:弊社スタッフ	6(月)、13(月)、21(火)振替、27(月)
10月	16(土) 企画展「華雅やきの赤絵細描～九谷赤絵の妙技」開催 (～12/12)	3(日) 17:00閉館、 4(月)～15(金) 展示替えのため *ただし、9(土)～11(月)はサロンのみ開館
11月	13(土) 特別講座①講演会「九谷焼・赤絵細描」 14:00～15:30 講師:福島武山氏 14(日) 特別講座②講演会「絵付体験」 13:00～16:00 講師:福島武山氏	1(月)、8(月)、15(月)、22(月)、29(月)
12月	12(日) 企画展「華雅やきの赤絵細描～九谷赤絵の妙技」終了	6(月)、12(日) 17:00閉館、 13(月)～15(水) 展示替えのため、 20(月)、27(月)～31(金) 年末年始のため
2011年1月	29(土) 第10回「江戸の化粧再現」講座 ①14:00～15:00 ②16:00～17:00 講師:弊社スタッフ	1(土)～4(火)、11(火)振替、 17(月)、24(月)、31(月)
2月		7(月)、14(月)、21(月)、28(月)
3月	5(土) 特別講座「風呂敷講座」 14:00～16:00 講師:日本風呂敷協会東京支部	7(月)、14(月)、22(火)振替、28(月)

*都合により、内容の変更が生じる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

Information

かわら版

講座のご案内

■「折形～江戸の優美なところ～」

「折形」とは、贈進の際に和紙で物品を包む礼法をルーツとするもので、贈り手の相手を思い敬う「心」を表します。

今回は、3種類の折形の解説と実演・体験をおこないます。

- ①古式の七夕飾りく五色の糸にちなんだ「もろもろの糸包み」
- ②四季折々に使えるカジュアルな「お祝い包み」
- ③慶事・弔事に使える「たとう包み」

講師:有馬霞水氏(東横学園女子短期大学 名誉教授)

2010年6月26日(土) 14:00～16:00 ■定員10名 ■参加費1,000円

下記電話にて先着順に予約を承ります(6/1受付開始)。

TEL: 03-5467-3735 (紅ミュージアム)

※定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。

■「夏休みこども自由研究 紅^{べに}ってなあに」

自由研究の一環として役立つよう、わかりやすく紅を紹介する内容です。「紅のおはなし」・「昔ながらの紅の作り方」・「紅を塗ってみよう」・「紅を食べてみよう」の4構成でコンパクトに解説します。

講師:弊社スタッフ

第1回: 2010年7月30日(金) 14:00～15:00

第2回: 2010年8月 6日(金) 14:00～15:00

■対象学年: 小学校3～4年生

(児童1名につき保護者1名同伴可。立ち見となります)

■定員10名 ■参加費無料

下記電話にて先着順に予約を承ります(7/1受付開始)。

TEL: 03-5467-3735 (紅ミュージアム)

※定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。

Since 1825
伊勢半本店  ミュージアム

●開館時間/11:00～19:00 ●休館日/毎週月曜日 ●入場無料 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735 東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>